

心を育てる道徳教材集



平成17年3月

 長崎県教育委員会

はじめに

一昨年そして昨年と、本県において2年続けて、尊い命が失われる痛ましい少年事件が発生しました。これらの事件を受けて、これまでの道德教育がどこまで子どもたちの心に届いていたか、今後、学校教育において命の大切さをいかに教えていくべきかが強く問われています。

昨年6月に佐世保市の小学校で起きた事件にかかる家庭裁判所の審判決定要旨によりますと、加害児童は自己の経験や共感に基づいた「死のイメージ」が希薄であるとのことでしたが、このことは他の子どもたちについても危惧されるところから、昨年11月から12月にかけて、県内の小中学生約3,000人を対象に「生と死」のイメージに関する意識調査を実施いたしました。

その結果、「死んだ人や動物が生き返る」と思っている児童生徒が少なからずいることや、子どもたちは、テレビやビデオ等、様々な情報の影響を受けて「死のイメージ」を形成していることなどがわかりました。

また、この事件の要因や背景等について、大学教授などの専門家にも意見を求めましたが、今の子どもたちは日常の生活の中で生や死の場面に接する機会が少なくなっており、テレビやゲームを通した痛みを伴わない死は現実感に欠けているため、人の死を安易にとらえやすい状況にあることが指摘されております。

そこで、長崎県教育委員会では、再発防止のための緊急的な課題の一つとして、子どもたちに「命の大切さ」や「生と死の意味」を見つめ考えさせるための道德教材集を作成することにいたしました。

作成に当たりましては、先の意識調査の結果や二つの事件の要因や背景等を踏まえ、命はただ一つ、一たび失われると取り返しのつかないものであることを子どもたちにしっかりと感じ取らせることができるよう、資料の選択や指導展開の工夫に努めました。

また、本県の独自性を生かすため、話材として、長崎の名物料理や精霊流し、被爆体験や普賢岳の噴火災害等を取り上げ、児童生徒にとって身近な教材となるよう配慮しております。

最後になりますが、この道德教材集の編集・執筆にご尽力いただいた立岡 誠 編集委員長をはじめ各委員の皆様には深く敬意を表しますとともに、県内の各小中学校において、児童生徒の発達段階に配慮しながら、本教材集を活用した授業を確実に実践し、本県の子どもたちに命を大切に作る心や他人を思いやる心などの豊かな心がしっかりと育まれることを切に願っております。

平成17年3月

長崎県教育委員会教育長 立石 暁

